

大東文化大学

東洋研究所所報

2020.7 No.73

目次

巻頭言 「カラスの要塞」 栗山 保之 …………… 1	2020 年度 研究所 名簿 …………… 11
2020 年度 東洋研究所共同研究課題 …………… 2～3	新刊案内 …………… 12
2019 年度 東洋研究所共同研究班活動報告 …… 4～9	2019 年度 発行 「東洋研究」 …………… 13
2019 年度 〔国際交流講演会〕 宗教儀礼に見る仙薬としての茶―「称名寺聖教」を中心に― 実践女子大学 文芸資料研究所客員研究員 張 名揚… 10	2020 年度 東洋研究所 秋の公開講座のお知らせ …………… 14

カラスの要塞

東洋研究所 教授 栗山 保之

私は、東西交流史に関心を抱き、インド洋の東西をつなぐイエメンの役割に注目して研究をしている。かつて、アラビア海沿いの港を調査していたとき、フスン・アルグラブという名の史跡に立ち寄ったことがある。高さ 100 メートルほどの台形状の小山フスン・アルグラブは、幹線道路からはずれた白浜のうえに、群青のアラビア海を背景にして隆起していた。アラビア語で「カラスの要塞」を意味する妙な名前は、黒々とした火山岩の山肌がカラスの黒羽の色に似ているところからつけられたのだということを目見て納得した。

50～70 年ごろに、アレキサンドリア居住のギリシア人商人が著した『エリュトウラー海案内記』には、フスン・アルグラブを含む周辺一帯がカネーという名の港として記録されている。同書には、この港から香料の一種として知られた乳香や薬用植物のアロエ、ラクダなどが積み出され、一方でエジプトから小麦や葡萄酒、アラブ風の衣服、銅、錫、珊瑚などがもたらされていたと記されている。カネーは、インド洋と地中海とを取り結ぶ国際貿易ルート上の港として、大いに繁栄していたのである。

このカネー港址を、その海側に位置しているフスン・アルグラブの山頂から眺めてみたくなった。この港址の人びとがその昔、その頂きで来航する船を待ち、出航してゆく船を見送っていたのだと想像すると、もうこの黒い小山しか目に入らなくなっていた。

そのとき突然、首にチクリと痛みを感じた。慌てて首を触ると、真っ赤な血が手のひらについていた。有刺鉄線が、首に刺さっていたのである。フスン・

アルグラブにばかり気をとられ、立ち入り禁止を示すその有刺鉄線の存在にまったく気づかなかったのだ。自分の間抜けさに腹がたったが、手を染める出血量に驚き、死ぬかもしれないと恐怖を覚え、タオルを首にあてて車に急いだ。

近郊の港町ムカッラーの病院に駆け込んだ。イエメン人の医師は、出血は止まっているが、化膿止めの飲み薬と注射が必要だと診察し、別室で処置を待つようにと言った。別室で待っていると、インド人の女医が薬と注射器を持って入ってきた。体に合わないからと拒否したが、飲み薬はドイツ製で注射器は使い捨てのフランス製だから大丈夫だと諭された。それでもしぶっていると、破傷風になって死ぬぞと脅され、観念した私はズブリと注射を打たれたのであった。

待合室で支払いの順番を待っていると、さきほどは気づかなかったが、そこにはイエメン人のほかに、イラン人、インド人、エチオピア人、インドネシア人、フィリピン人といったインド洋周辺諸地域を出自とする人びとが、おしゃべりをしたり、菓子をつまんだりしながら、自分の順番を待っていた。イエメンに暮らした 2 年もの間、一度も病院にかからなかったことで想像したこともなかったが、病院のなかでも、イエメンの市中と同様に、東西交流の歴史をうかがい知ることができるのかもしれないと考えながら、彼らをぼんやり見ていた。

最近、15 世紀末のアラブの船乗りが著したインド洋航海技術書に、航海の目印のひとつとしてフスン・アルグラブが言及されているのをみつけ、ふと思い出したので記した次第である。

2020年度 東洋研究所共同研究課題

第1班	<p style="text-align: center;">中華人民共和国 100 年史研究—日中関係の今後を見据えて</p> <p>期間 2019～2021年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（16名） 團岡崎 邦彦〔主任〕 団田中 寛、齊藤 哲郎、鹿嶋 俊、高田 茂臣 団鏡屋 一、伊藤 一彦、上野 英詞、植松 希久磨、江崎 隆哉、小島 麗逸、近藤 邦康、篠永 宣孝、柴田 善雅、嶋 亜弥子、由川 稔</p> <p>概要 研究計画は3年間の短期計画（2019～2021）と10年をかけた長期計画（2020～2030）から構成される。計画では、日中関係を含む「中国共産党100年史年表」（1921～2020）、および「中華人民共和国100年史年表」（1949～2048）の二つの百年史年表を研究、整理し、さらに公刊に向けて準備する。</p> <p>まず、中華人民共和国建国以前の歴史と日中関係について様々な分野から整理し、戦後日中関係において引き継がれた課題を明らかにする。さらに、中華人民共和国建国後については、これを毛沢東の時代（1949～1976）と鄧小平の時代（1978～2012）、そして習近平の時代（2012～）に分け、それぞれの内政、外交、日中関係について整理していく。そこでは毛沢東の「社会主義の道」、鄧小平が提起した「新たな社会主義と改革開放」、さらに習近平のめざす「中国の特色ある社会主義の新時代」構想、その政策の連続性と問題点について検討する。特に、習近平の中国の「中華振興」、「一路一帯」にみる世界認識と覇権主義、さらに国内における民衆の自由、民主の要求と共産党政治の問題点を明らかにする。</p> <p>なお従来からのテーマ、20世紀、21世紀の中国の対外抵抗、対内改革と日本についての研究を継続させ、日中間であらたな世界秩序を創造していくモデルを考えていく。</p>
	<p style="text-align: center;">類書文化研究—『藝文類聚』を中心に—</p> <p>期間 2020～2022年度（継続）</p> <p>メンバー（11名） 団田中 良明〔主任〕 団小塚 由博、高橋 睦美、宮瀧 交二、藏中 しのぶ 団芦川 敏彦、小林 敏男、中林 史朗、成田 守、浜口 俊裕、日吉 盛幸</p> <p>概要 本邦に伝来する最古の現存類書の『藝文類聚』は、我が国の古典文学に多大の影響を与えていることは周知の事実である。</p> <p>それが今日に至るまで雑家の書として等閑視されてきた嫌いがある。それ故、未読解の本書を訓読して、原典との校勘、典拠の解明、索引の作成をすることは、単に国文学への影響のみならず、類書学上においても大いに貢献するものであると考える。</p> <p>その研究成果を逐年刊行して今日に及んでおり、斯学の評価を得ている。</p> <p>なお、近年の研究活動の実態に即し、2020年度以降は、研究課題を「日中文学の比較文学的研究」より「類書文化研究」に改める。</p>
第2班	<p style="text-align: center;">アジア史のための欧文史料の研究</p> <p>期間 2020～2022年度（継続）</p> <p>メンバー（4名） 団滝口 明子〔主任〕、齋藤 俊輔 団出田 恵史、山田 準</p> <p>概要 本研究の目的は、アジアに関わるヨーロッパ人による旅行記や地理書、年代記などの研究を通じて、アジア史において欧文史料を再評価するとともに、アジア史の進展に貢献することにある。</p> <p>近年まで、アジア史における欧文史料の位置づけは、ヨーロッパ中心史観の見直しが進む中で現地語史料に準ずるものとする傾向が強まった。しかし、最近では、アジアの現地語史料による研究が進んできたことで欧文史料の重要性が見直されている。実際のところ、欧文史料、とくに大航海時代以降について、年代記だけでなく、植民地文書、そして宣教師の書簡などが多く残り、アジア史研究にとって非常に重要であることはかわりない。また、ヨーロッパ中心史観としてアジア史に関連する欧語史料を排除することは研究の進展を妨げかねない。</p> <p>本研究は、こうした現況をふまえ、アジア史に関連する欧文史料の研究を進める。具体的には、1) アジア史研究に有用と思われるヨーロッパ人による旅行記や地理書などに訳注をほどこし、出版することを目指すとともに、2) 当該史料の周辺を複数の同時代史料で補い、研究を深める。</p> <p>なお、本研究の観点は、アジア史のみならず、近年盛んになっている「グローバルヒストリー」のような世界史研究に貢献するものと考えている。グローバルヒストリーは、世界各地の比較や連動性を重視している。本研究で取り上げる史料群は、アジアやアフリカ、アメリカでの交渉を含むものであり、その研究は世界史研究の進展にも十分資すると考えられる。</p>
	<p style="text-align: center;">唐・李鳳の『天文要録』の研究（訳注作業を中心として）</p> <p>期間 2019～2021年度（研究期間中）</p> <p>メンバー（12名） 団小林 春樹〔主任〕、田中 良明 団小坂 真二、小林 龍彦、進藤 英幸、高橋 あやの、中村 聡、中村 士、濱 久雄、細井 浩志、山下 克明、渡邊 義浩</p> <p>概要 前田尊経閣文庫のみに現存する貴重な逸存書である『天文要録』（唐・李鳳撰）の巻五「月占」の巻頭から訓読・訳注作業をおこない、研究最終年度にその成果を「『天文要録』の考察【四】」として刊行する。</p>
第3班	<p style="text-align: center;">茶の湯と座の文芸</p> <p>期間 2020～2022年度（継続）</p> <p>メンバー（14名） 団藏中 しのぶ〔主任〕、団相田 満、安保 博史、王 宝平、オレグ・プリミアニ、菅野 友巳、藏田 明子、笹生 美貴子、高木 ゆみ子、布村 浩一、フレデリック・ジラル、松本 公一、三田 明弘、矢ヶ崎 善太郎</p> <p>概要 2004（H16）～2006（H18）年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）「茶の湯と座の文芸の本質の研究—『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」の成果、および2008（H20）～2019（R1）年度の東洋研究所研究班「茶の湯と座の文芸」の成果として刊行した『茶譜 巻一注釈』～『茶譜 巻十一（下）注釈』を発展的に継承すべく、江戸時代中期寛文年間の成立とされる茶道百科事典『茶譜』全十八巻の注釈研究を継続しておこなう。</p> <p>研究分担者は、科研費研究から継続して参加する藏中しのぶ（日本文学・上代中古文学）、相田満（人文情報学・中古中世文学）に加えて、安保博史（日本文学・近世文学）、矢ヶ崎善太郎（建築史・茶室建築）、三田明弘（日本文学・中世文学）、パリから高木ゆみ子（歴史学・茶道史）、フレデリック・ジラル（仏教思想史）、中国から王宝平（日本文学）、兼任研究員として、松本公一（歴史学・日本文化史学）、オレグ・プリミアニ（日本文学・日本語文化学）、藏田明子（国際政治学）、菅野友巳（芸術学）、笹生美貴子（日本文学・中古文学）、布村浩一（日本文学・中古文学）であり、茶道文献を対象とした学際研究をめざす。あわせて、『茶譜』全巻のシソーラス・データベース構築をめざす。</p>
	<p style="text-align: center;">茶の湯と座の文芸</p> <p>期間 2020～2022年度（継続）</p> <p>メンバー（14名） 団藏中 しのぶ〔主任〕、団相田 満、安保 博史、王 宝平、オレグ・プリミアニ、菅野 友巳、藏田 明子、笹生 美貴子、高木 ゆみ子、布村 浩一、フレデリック・ジラル、松本 公一、三田 明弘、矢ヶ崎 善太郎</p> <p>概要 2004（H16）～2006（H18）年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（C）（2）「茶の湯と座の文芸の本質の研究—『茶譜』を軸とする知的体系の継承と人的ネットワーク」の成果、および2008（H20）～2019（R1）年度の東洋研究所研究班「茶の湯と座の文芸」の成果として刊行した『茶譜 巻一注釈』～『茶譜 巻十一（下）注釈』を発展的に継承すべく、江戸時代中期寛文年間の成立とされる茶道百科事典『茶譜』全十八巻の注釈研究を継続しておこなう。</p> <p>研究分担者は、科研費研究から継続して参加する藏中しのぶ（日本文学・上代中古文学）、相田満（人文情報学・中古中世文学）に加えて、安保博史（日本文学・近世文学）、矢ヶ崎善太郎（建築史・茶室建築）、三田明弘（日本文学・中世文学）、パリから高木ゆみ子（歴史学・茶道史）、フレデリック・ジラル（仏教思想史）、中国から王宝平（日本文学）、兼任研究員として、松本公一（歴史学・日本文化史学）、オレグ・プリミアニ（日本文学・日本語文化学）、藏田明子（国際政治学）、菅野友巳（芸術学）、笹生美貴子（日本文学・中古文学）、布村浩一（日本文学・中古文学）であり、茶道文献を対象とした学際研究をめざす。あわせて、『茶譜』全巻のシソーラス・データベース構築をめざす。</p>

第6班	西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容—イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—
	期間 2018～2020年度（研究期間中）
	メンバー（14名） 団吉村 武典〔主任〕 団アブドリ・ケイワン、石井 啓一郎、藏田 明子、斎藤 正道、鈴木 珠里、ソレマニエ 貴実也、中村 菜穂、南里 浩子、林 裕、原 隆一、深見 和子、山田 準、吉田 雄介
	概要 西アジア地域は、イラン文化圏、アラブ文化圏、中央アジア・トルコ文化圏にまたがる広大な地域にまたがり、相互に交流しながら独自の社会、文化を構築、発展し続けてきた。例えば、アフガニスタン、タジキスタン、クルディスタンなどを含むイラン文化圏では、ペルシア語系の言語や太陽暦の春分を新年（ノウルーズ）として祝う生活文化があげられる。これらは周辺のアラブ、中央アジア、トルコ、インドなどの文化圏との歴史的な交流から生まれたものだが、同時にそれら周辺の文化圏が持つイスラームや遊牧民がもたらした文化や生活習慣もイラン文化圏に影響を与つづけて来た。 本研究では、第2期まで行ってきた、イラン文化圏を基礎とした社会文化の変容に関する研究を発展的に継承し、西アジア地域全体へと視野を拡大する。特に農業や灌漑技術の開発・拡散・需要、生活様式や用具の生産、流通、消費といったモノと、それらを利用する人々の技術（知恵）、思想、文学、歴史など知的生産物の双方を通して、西アジア地域の環境、社会、文化が持つ地脈を考察する。 第2期までに行ってきた、先人の研究成果やその手法の総括を継続し、研究参加者による新たな研究視点や手法を確立していく、研究成果の公表を積極的に行っていく。
第7班	岡倉天心（覚三）にとつての「伝統と近代」
	期間 2019～2021年度（研究期間中）
	メンバー（8名） 団田辺 清〔主任〕、宮瀧 交二 団池田 久代、岡倉 登志、岡本 佳子、佐藤 志乃、篠永 宣孝、依田 徹
	概要 岡倉天心（1862-1913）は、幼時より漢籍そしてヘボン塾で英語を学び、東京開成学校に入学、1877年東京大学で政治学、理財学ならびにフェノロサについて哲学を学び、卒業後、フェノロサの日本美術研究に協力し、古美術の研究と新しい日本画の樹立を志した。1886年文部省の美術取調委員としてフェノロサとアメリカ経由でヨーロッパを巡り翌年帰国、東京美術学校の創設、1890年校長に就任した。 この間美術専門誌『国華』を創刊、日本絵画協会主宰、帝室技芸員選抜委員、古社寺保存会委員に任ぜられ、1898年校長を辞職、橋本雅邦、横山大観、菱田春草、下村観山らと日本美術院を創設、新しい日本画を志して美術運動をおこした。1904年（明治37）大観、春草を伴い渡米し、ボストン美術館の仕事にあたり、1905年同館の東洋部長となり、1906年ニューヨークで『茶の本』を出版、その年の末に日本美術院を茨城県五浦へ移し、大観、春草、観山らと住み、1907年文部省美術審査委員会委員となり、1908年国画玉成会を結成、1910年東京帝国大学で「泰東巧芸史」を講義した。翌年欧米旅行を行い、ハーバード大学からマスター・オブ・アーツの学位を受けた。続いて1912年インド、ヨーロッパを経て渡米し、1913年（大正2）病を得て帰国、療養に努めたが、同年9月2日新潟県赤倉山荘で没した。英文著書『東洋の理想』（1903）、『日本の覚醒（かくせい）』（1904）、『茶の本』（1906）などは外国人はもちろん、翻訳されて広く日本人にも影響を与えた。 岡倉天心研究はまだまだ研究されなければならない点があるが、本研究部会においては、岡倉天心の「伝統と近代」に着目し幅広い研究を進めていきたい。
第8班	南アジア社会における包摂と排除
	期間 2018～2020年度（研究期間中）
	メンバー（12名） 団小尾 淳〔主任〕、J・アバイ、篠田 隆、須田 敏彦、井上 貴子、鈴木 真弥 団石坂 晋哉、石田 英明、片岡 弘次、舟橋 健太、増木 優衣、ムハマド・ズベル
	概要 多言語多民族国家により構成されている南アジアでは、近年の政治経済社会変動のなかで、社会を構成する多様な集団間の統合とアイデンティティをめぐる関係も変化し、その結果、基本的人権や国民が平等に享受すべき諸種の権利から「排除」(Exclusion)される個人や集団が生じている。他方、この排除の現実を踏まえたうえで、多様な集団間の統合とアイデンティティの強化、すなわち「包摂」(Inclusion)を求める政治経済社会運動も展開している。 本研究では、多様な民族、宗教、カースト、階級構成をもつ南アジア社会で周辺に置付けられてきた集団を対象として、彼らと社会変動との関わりを「包摂」と「排除」の観点から分析する。彼らはどのような文学、政治、社会運動をとおして、自らの行動規範や価値観を再構成し新たなアイデンティティを模索し「包摂」を求めてきたのか、彼らに対してどのような「排除」の仕組みや圧力が働いてきたのかを、社会学や経済学を専門とする委員と歴史学、文学を専門とする委員の共同作業をとおして、総合的に研究する。
第9班	明清の文言小説と文人たち—張潮『虞初新志』訳注—
	期間 2019～2021年度（研究期間中）
	メンバー（5名） 団小塚 由博〔主任〕 団田中 良明 団荒井 礼、今井 秀和、小川 陽一
	概要 清初の文人張潮が編纂した文言小説集『虞初新志』を訓読し、現代日本語に翻訳し、注釈等を施す。『虞初新志』には全20巻、150作品が収められている。 明から清にかけて、「虞初」の名を冠した小説集が複数編纂されたが、とりわけ本作品は過去（六朝・唐等）の作品を集めたのではなく、同時代の人物の作品を集めたことが大きな特徴的である。彼らは編者張潮の友人・知人が多く、彼の交遊関係が大きく影響している。 また、本作品は中国だけではなく、日本にも江戸時代中期以降に伝来し、和刻本が刊行されており、日本文学との関係も見られる。 3年間の成果としては分量の都合上、そのうち3巻（自序・凡例・跋文を含む）を対象とする。

2019年度 東洋研究所共同研究班活動報告

第1班	中華人民共和国 100 年史研究 一日中関係の今後を見据えて				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容・発表者)
	1	7月20日	大東文化会館 K401	15 名	「現代の中国指導者研究—毛沢東から習近平」 岡崎邦彦
	2	9月21日	大東文化会館 K401	20 名	「習近平講話とその言語表現」 植松希久磨 「2000～2010年の日中関係について—年表に見る日中関係」 岡崎邦彦
	3	12月21日	大東文化会館 K401	20 名	「中国と朝鮮半島 2019年」 伊藤一彦 「中国政治と日中関係 1972～2014年」 岡崎邦彦
4	2月15日	大東文化会館 K302	16 名	※ 小島麗逸「中国経済研究会」との合同研究会 「東アジアの海洋は今 ～米中覇権抗争の主戦域に～」 上野英詞	
5	3月16日	大東文化会館 K301		「フランスの極東問題 1900～1940年」 篠永宣孝 ⇒ 新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点より中止	
第2班	日中文学の比較文学的研究—『藝文類聚』を中心にして—				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容・発表者)
	1	4月20日	東洋研共同研究室	9 名	『藝文類聚』巻 50 太守 (高橋・中林)
	2	5月11日	東洋研共同研究室	8 名	『藝文類聚』巻 50 令長 (田中・小塚)
	3	6月 1日	東洋研共同研究室	8 名	『藝文類聚』巻 50 太守・同 51 総裁封爵 (芦川・石井)
	4	7月20日	東洋研共同研究室	8 名	『藝文類聚』巻 51 総裁封爵・親戚封 (中林・高橋)
	5	9月28日	板橋校舎 2-0423	7 名	『藝文類聚』巻 51 親戚封 (芦川)
	6	10月19日	板橋校舎 2-0423	7 名	『藝文類聚』巻 51 功臣封・遜讓封 (田中・小塚)
	7	11月30日	東洋研共同研究室	8 名	『藝文類聚』巻 51 遜讓封 (石井)
	8	12月21日	東洋研共同研究室	7 名	『藝文類聚』巻 51 遜讓封 (石井)
	9	1月25日	東洋研共同研究室	8 名	『藝文類聚』巻 51 外戚封・婦人封・尊賢継絶封 (高橋・中林)
	2-0423: 中国文学科研究スペース				
No.	研究成果物 (刊行物等)				
1	『藝文類聚 (巻四十八) 訓讀付索引』 (2020年2月25日発行)				
第3班	西欧植民地主義再考				
	研究班の活動				
	No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容・発表者)
	1	4月19日	ビッグエコー成増店	4 名	「クラシックバレエにおける「身体イメージ」と「鏡」について」 出田恵史
	2	7月19日	ビッグエコー成増店	4 名	「来年度研究計画と主任について」 齋藤俊輔・滝口明子・山田 準 「秋の公開講座の内容について」 齋藤俊輔・滝口明子・山田 準
	3	1月22日	ビッグエコー成増店	4 名	「秋の公開講座報告と今後の研究班の計画について」 齋藤俊輔・滝口明子・山田 準
	No.	開催日時	開催場所	受講生	秋の公開講座 (テーマ・講師)
	1	11月 7日 13～15時	大東文化会館 K-0302 研修室	37 名	「ポルトガルのアジア進出と植民地社会の形成 —インドア領の多民族性をめぐって—」 齋藤俊輔
	2	11月14日 13～15時	大東文化会館 K-0302 研修室	37 名	「お茶を愉しむ ～絵画でたどるヨーロッパ茶文化～」 滝口明子
	3	11月21日 13～15時	大東文化会館 K-0302 研修室	35 名	「コーヒー文化とオランダ ～オランダ東インド会社のコーヒー文化への貢献～」 山田 準
	所属研究員の活動				
No.	学会等での発表				
1	齋藤俊輔 日時 2019年6月8日 場所 大東文化会館1階ホール テーマ 日本音楽学会東日本支部第59回定例研究会 「群馬県大泉町における在日ブラジル人文化の受容、そして現在—外国人の集住が地域社会の文化形成に与える影響」				
No.	刊行物等 (論文)				
1	齋藤俊輔 タイトル 「古代・中世 (南アジア、2018年の歴史学界—回顧と展望—) 出版社等 『史学雑誌』第128編第5号、284頁-288頁 発行年月 2019年5月15日				

第3班	2	出田恵史 タイトル 「クラシックバレエにおける「身体イメージ」と「鏡」の民俗誌的研究 ―タイのバレエ団の事例から」 出版社等 『東洋研究』第212号、91頁-135頁 発行年月 2019年7月25日
	3	滝口明子 タイトル 『トルコ装束の画家』リオータル研究序説 ―文化史的考察― 出版社等 『東洋研究』第215号、51頁-75頁 発行年月 2020年1月25日
	No.	講演会
	1	滝口明子 タイトル 「ヨーロッパ茶文化の広がり～社交の場から家庭生活へ」(日本紅茶協会ティーインストラクター会研究会) 場 所 神戸外国倶楽部 発行年月 2019年10月24日
第4班	唐・李鳳撰の『天文要録』の研究(訳注作業を中心として)	
	研究班の活動	
	No.	開催日時 開催場所 参加人数 研究会(テーマ・内容・発表者)
	1	4月13日 東洋研共同研究室 4名 『天文要録』巻4「月占」 訳注原稿完成作業
	2	6月 8日 東洋研共同研究室 4名 『天文要録』巻4「月占」 訳注原稿完成作業
	3	7月 6日 東洋研共同研究室 4名 『天文要録』巻4「月占」 訳注原稿完成作業
	4	9月21日 東洋研共同研究室 4名 『天文要録』巻4「月占」 訳注原稿完成作業
	5	11月16日 東洋研共同研究室 4名 『天文要録』巻4「月占」 訳注原稿完成作業
	所属研究員の活動	
	No.	刊行物等(論文)
1	高橋あやの ・【補遺】「張衡の天文学思想」(汲古書院、2019年12月)	
第5班	茶の湯と座の文芸	
	研究班の活動	
	No.	開催日時 開催場所 参加人数 研究会(テーマ・内容・発表者)
	1	4月 9日 板橋校舎 1-0508 22(14)名 『茶譜』巻十一(下) 13の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗)
	2	4月16日 板橋校舎 1-0508 21(14)名 『茶譜』巻十一(下) 13の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗)
	3	4月23日 板橋校舎 1-0508 21(14)名 『茶譜』巻十一(下) 13の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗)
	4	5月 7日 板橋校舎 1-0508 23(14)名 『茶譜』巻十一(下) 14の検討 (相田・矢ヶ崎・飯島・藏田・楊世瑾・チャンボン)
	5	5月14日 板橋校舎 1-0508 23(14)名 『茶譜』巻十一(下) 14の検討 (相田・矢ヶ崎・飯島・藏田・楊世瑾・チャンボン)
	6	5月28日 板橋校舎 1-0508 23(14)名 『茶譜』巻十一(下) 14の検討 (相田・矢ヶ崎・飯島・藏田・楊世瑾・チャンボン)
	7	6月 4日 板橋校舎 1-0508 22(14)名 『茶譜』巻十一(下) 15の検討 (安保・松本・布村・菅野・加藤・賀輝明・チェットラー)
	8	6月11日 板橋校舎 1-0508 19(11)名 『茶譜』巻十一(下) 15の検討 (安保・松本・布村・菅野・加藤・賀輝明・チェットラー)
	9	6月18日 板橋校舎 1-0508 18(11)名 『茶譜』巻十一(下) 16の検討 (三田・北井・プリミアニー・郭凱晟・王海榮)
	10	6月25日 板橋校舎 1-0508 18(11)名 『茶譜』巻十一(下) 16の検討 (三田・北井・プリミアニー・郭凱晟・王海榮)
	11	7月 2日 板橋校舎 1-0508 18(11)名 『茶譜』巻十一(下) 16の検討 (三田・北井・プリミアニー・郭凱晟・王海榮)
	12	7月 9日 板橋校舎 1-0508 18(11)名 『茶譜』巻十一(下) 16の検討 (三田・北井・プリミアニー・郭凱晟・王海榮)
	13	7月16日 板橋校舎 1-0508 18(11)名 『茶譜』巻十一(下) 17の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗・范文娜)
	14	7月23日 板橋校舎 1-0508 17(11)名 『茶譜』巻十一(下) 17の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗・范文娜)
	15	8月23日 池坊短期大学 13(4)名 『茶譜』巻十一(下) 20の検討 (矢ヶ崎・相田・藏田・飯島・楊世瑾・チャンボン)
	16	8月24日 池坊短期大学 11(4)名 『茶譜』巻十一(下) 19の検討 (松本・布村・菅野・加藤・賀輝明)
	17	9月17日 板橋校舎 1-0508 18(11)名 『茶譜』巻十一(下) 21の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗・范文娜)
	18	9月24日 板橋校舎 1-0508 18(11)名 『茶譜』巻十一(下) 21の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗・范文娜)
	19	10月 1日 板橋校舎 1-0508 19(11)名 『茶譜』巻十一(下) 21の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗・范文娜)
	20	10月 8日 板橋校舎 1-0508 19(11)名 『茶譜』巻十一(下) 21の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗・范文娜)
	21	10月15日 板橋校舎 1-0508 18(11)名 『茶譜』巻十一(下) 21の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗・范文娜)
	22	10月22日 板橋校舎 1-0508 18(11)名 『茶譜』巻十一(下) 21の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗・范文娜)
	23	10月29日 板橋校舎 1-0508 17(11)名 『茶譜』巻十一(下) 21の検討 (佐藤・笹生・高木・楊亜麗・范文娜)
	24	11月12日 板橋校舎 1-0508 20(11)名 『茶譜』巻十一(下) 20の検討 (相田・矢ヶ崎・飯島・藏田・楊世瑾・チャンボン)
	25	11月19日 板橋校舎 1-0508 20(11)名 『茶譜』巻十一(下) 20の検討 (相田・矢ヶ崎・飯島・藏田・楊世瑾・チャンボン)
	26	11月26日 板橋校舎 1-0508 20(11)名 『茶譜』巻十一(下) 20の検討 (相田・矢ヶ崎・飯島・藏田・楊世瑾・チャンボン)
27	12月 3日 板橋校舎 1-0508 20(11)名 『茶譜』巻十一(下) 20の検討 (相田・矢ヶ崎・飯島・藏田・楊世瑾・チャンボン)	

第5班	28	12月10日	板橋校舎 1-0508	18(11)名	『茶譜』巻十一(下) 22の検討 (三田・北井・プリミアニ・郭凱晟・王海榮)
	29	12月17日	板橋校舎 1-0508	20(11)名	『茶譜』巻十一(下) 23の検討 (安保・松本・布村・菅野・加藤・賀輝明・チェットラー)
	30	12月22日	大東文化会館 K403	14(5)名	『茶譜』巻十一(下) 24の検討、原稿確認 (三田・北井・プリミアニ・郭凱晟・王海榮)
	31	1月28日	板橋校舎 2-0646	13(5)名	『茶譜』巻十一(下) 初校確認
	32	2月 8日	板橋校舎 2-0646	12(5)名	『茶譜』巻十一(下) 再校、再校返し
	33	2月14日	板橋校舎 2-0646	12(5)名	『茶譜』巻十一(下) 三校、三校返し
	34	2月18日	板橋校舎 2-0646	6(5)名	『茶譜』巻十一(下) 念校、念校返し
	35	2月28日	パリ国際大学都市 日本館	3(1)名	パリ支部研究協議
	36	2月29日	パリ国際大学都市 日本館	3(1)名	パリ支部研究協議
	2-0646: 蔵中研究室 参加人数()は研究員以外で内数				
No.	シンポジウム				
1	<p>日仏伊共同シンポジウム 日 時 2020年2月22日(土) 場 所 パリ国際大学都市日本館大ホール 参加者 38名 発表者 安保博史、フレデリック・ジラルール、高木ゆみ子、蔵中しのぶ テーマ 「茶の湯・香と座の文芸—江戸の絵入り百科事典『茶譜』の世界—」 内 容 「開会の辞」パリ日本館館長 押村 高 「シンポジウムへのいざない—茶の湯・香と座の文芸—江戸の絵入り百科事典と『茶譜』の世界—」蔵中しのぶ 「江戸の絵入り百科事典『茶譜』の世界」安保博史 「『喫茶養生記』から『禅茶録』へ」フレデリック・ジラルール 「茶席」日本館茶の湯会(在仏日本人会)高木ゆみ子、北井千鶴 「『侘び』『さび』以前—岡倉天心『茶の本』20世紀における茶書の背景と影響」アルチュール・ミト 「『茶譜』の茶道具を読む—『茶譜』巻十一 13「大海茶入」の点前—」高木ゆみ子 「『茶譜』巻五「墨蹟写」と禅の茶掛—江戸の絵入り百科事典『茶譜』の具体相—」蔵中しのぶ パネルディスカッション「茶の湯・香と座の文芸—江戸の絵入り百科事典『茶譜』の世界—」 蔵中、安保、フレデリック・ジラルール、高木、アントニオ・マニエーリ、アルチュール・ミト 志野流香道「組香」実演 マルク・アントワヌ・アルスラン その他 講評 トウンマン武井典子</p>				
No.	調査				
1	日 時 2020年2月21日(金) 場 所 パリ・レスコヴィッチ美術館 出張者 蔵中しのぶ、高木ゆみ子、安保博史 目 的 刷りもの調査 成 果 日仏伊共同シンポジウムで研究発表(パネルディスカッション) その他 今後調査継続予定				
No.	研究成果物(刊行物等)				
1	『茶譜』巻十一(下)注釈(2020年3月6日発行)				
西アジア地域における社会と文化の伝統・交流・変容 —イラン・アラブ・トルコ文化圏の越境—					
研究班の活動					
No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会(テーマ・内容・発表者)	
1	4月21日	大東文化会館 302 研修室	26名	第1回 大東 西アジア研究会 「自分史としてのイラン・イスラーム革命」八尾 師誠(東京外国語大学名誉教授) 「私の個人的イラン革命—シーラーズから—」原 隆一(大東文化大学名誉教授)	
2	7月 7日	大東文化会館 404 研修室	12名	第2回 大東 西アジア研究会 「アリー・シャリーアティー研究の変遷と課題」 村山 木乃実(東京外国語大学博士後期課程/日本学術振興会特別研究員 DC2) 鈴木 均(アジア経済研究所)	
3	10月20日	大東文化会館 302 研修室	25名	第3回 大東 西アジア研究会 講演「サアディー財団について」アリー・アシュラフ・サーデギー先生 ペルシア語教育に関する研究会	
4	12月15日	大東文化会館 301 研修室	10名	第4回 大東 西アジア研究会 「詩人モハンマド・ホセイン・シャフリヤールのアゼルバイジャン語作品をみる三つの視点」 石井 啓一郎(翻訳家/東洋研究所兼任研究員) 「共同体と詩—アボルガーセム・ラーフアティー(1887-1957)の遍歴と詩の故郷をめぐる—」 中村 菜穂(大東文化大学非常勤講師/東洋研究所兼任研究員)	
5	2月 9日	大東文化会館 301 研修室	18名	第5回 大東 西アジア研究会「乾燥地の生活水資源利用と地域社会の変化—歴史・現在・未来—」 「ザーヤンデルド下流域ヴァルザネにおける生業を通じた重層的な資源管理と利用」 西川 優花(大阪大学) 「近代バシュトゥーン社会における水上交通と政治—中村哲医師の活動地域を中心に—」 登利谷 正人(上智大学) 「ペルシア井戸と地下水利用から見た社会変化—インド、サウディ・アラビアの事例から—」 遠藤 仁(秋田大学) 「前近代カイロの生活用水と水資源利用に関する史料と研究」吉村 武典(大東文化大学)	
No.	研究成果物(刊行物等)				
1	『大野盛雄フィールドワークの軌跡 IV—乾燥地域の「米の道」稲作から米の料理まで1988-1993年—』 原 隆一・南里浩子 編(2020年2月25日発行)				

第6班	所属研究員の活動			
	No.	学会等での発表		
	1	吉村武典 ・2019年8月26日、アレクサンドリア図書館国際会議場、 “Sabils in Cairo”, International Workshop: “Network and Urban Landscape in Historical Perspective”		
	No.	刊行物等		
	1	石井啓一郎 ・“On Japanese Socio-Cultural Locutions in Literary Creations: On Ferhad Ile Şirin of Nazım Hikmet”, Esin ESEN and Ryō MIYASHITA (eds.), Shaping the Field of Translation, In Japanese - Turkish Contexts I, Berlin: Peter Lang GmbH, May 2019, pp. 107-124.		
	2	ソレマニエ貴実也 ・「テヘラン」「タブリーズ、布野修司編『世界都市史事典』昭和堂、2019		
	3	中村菜穂 ・「アボルガーセム・ラーフーティ（1887-1957）の1922年以前の遍歴と詩作—詩的言語にみる対立と葛藤の要素について」 『日本中東学会年報』35-1（2019）、1-42頁 ・「イラン立憲革命期における詩的言語の研究」博士学位論文、東京外国語大学、2020年3月 ・「分担執筆（翻訳、解説）」『翻訳：バルヴィーン・エテサーミー「孤児の涙／二滴の血」』（34-43頁）、「解説：「階級」「象徴」」（42-43頁）、 奥彩子、嶋戸聡、中村隆之、福嶋伸洋編『世界の文学、文学の世界』松籟社、2020年3月（翻訳） ・「近代イランの抵抗の歌の起源をめぐって—アーレフ・ガズヴィーニー（1878頃-1934）における詩的言語についての一考察」 『東洋研究』第211号（2019年1月）		
	4	林 裕 ・「開発援助を評価する援助関係者を考える：アフガニスタンをめぐる復興・開発援助」 『SDGs時代のグローバル開発協力論』明石書店、2019年10月		
	5	深見和子 ・「近代イランの植物学的研究—東洋文庫所蔵A、ガフレマン著植物写真集『イラン植物誌（Flore de l'Iran）』について—」、 『東洋文庫書報』第51号、2020年3月、79-99頁		
	6	吉田雄介 ・「手織物生産から見る遊牧と定住の間—イラン・チャハルマハール&パフティヤーラー州の事例から—」『東洋研究』213（2019）、63-89頁		
7	吉村武典 ・「回顧と展望：西アジア・北アフリカ（イスラーム時代）」『史学雑誌』第128篇第5号（2019）、300-304頁 ・「水辺のカイロ—都市のくらしと水問題」『FIELDPLUS』23、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、6-7頁			
第7班	岡倉天心（覚三）にとつての「伝統と近代」			
	研究班の活動			
	No.	開催日時	開催場所	参加人数
	1	7月20日	大東文化会館 K302 研修室	天心研究班 鵬の会 計10名
	研究会（テーマ・内容・発表者）			
	「新納忠之介（古拙）と岡倉天心—古美術修復への貢献」 岡倉登志 「明治15（1882）年に撮影された1枚の写真 天心、モースとビゲロウ」 宮瀧交二 「『矢代幸雄と岡倉天心』+ 論集『天心をめぐる人々』（仮）について」 田辺 清			
	No.	刊行物等		
	1	『鵬』岡倉天心研究会「鵬の会」会誌 第八号（2019年夏期）		
	2	『天心をめぐる人々』（本研究班）2020年3月25日発行（東洋研究所）		
	研究班の活動			
	No.	学会等での発表		
	1	依田 徹 日 時 2019年6月29日（土） 場 所 根津美術館 参加者 50名 テーマ 松平親良と瓢々庵について 内 容 新出史料の「八百善茶会記」に登場する未詳の茶人である「瓢々庵」について、他の史料との照合から、杵築藩主であった松平親良であることを証明し、その活動について紹介した。		
	2	岡本佳子 日 時 2019年11月17日（日） 場 所 東北大学 テーマ 岡倉覚三における日本・中国・インド—「アジア」文明論の観点から—		
	No.	刊行物等		
1	依田 徹 書 名 『マボロシの茶道具図巻』 概 要 本能寺の変や大坂夏の陣などで失われた名物茶道具について、文献史料などから情報を集め、イラストで再現して紹介するカラームック。 出版社等 淡交社 発行年月 2019年9月30日			
2	依田 徹 書 名 『茶の湯文化学会誌 第32号』「渡辺驥と明治東京—「無物庵」の額字を中心に」 概 要 明治期の茶人として知られる法曹官僚の渡辺驥について、基礎的な情報を確認するとともに、当時の茶人たちが皇族への願っていた状況を新出史料から確認した。 出版社等 茶の湯文化学会 発行年月 2019年10月			
No.	その他			
1	岡倉登志 2019年11月1日（金）ABCテレビ『正義のミカタ』（エチオピア問題）出演			

南アジアにおける包摂と排除				
研究班の活動				
No.	開催日時	開催場所	参加人数	研究会（テーマ・内容・発表者）
1	5月7日	東松山キャンパス 第2研究棟 須田研究室	8名	「鳩山町のモスク訪問報告」 片岡弘次 「南アジアにおけるマイノリティの生存戦略—包摂と排除から共棲へ—」 井上貴子
2	7月23日	東松山キャンパス 第2研究棟 3階大会議室	7名	「ヒンディー文学とムスリム」 石田英明
3	12月17日	東松山キャンパス 第2研究棟 3階小会議室	8名	「インドにおける牧畜カーストの挑戦」 篠田 隆
4	2月13日	東松山キャンパス 第2研究棟 3階大会議室	10名	「インドからの移民の現状—日本への影響を考える (Recent Migration of Indians: Potential Impact on Japan)」 G. Balatchandirane 「増加するバングラデシュからの女性海外出稼ぎ労働者」 須田敏彦
No.	その他			
1	2020年度は須田敏彦教授がサバティカル研修で不在となるため、主任代理を小尾淳助教が務めることとなった。			
研究班の活動				
No.	学会等での発表			
1	井上貴子 日 時 2019年6月8日 場 所 大東文化会館 テーマ 日本音楽学会東日本支部第59回定例研究会 シンポジウム「音楽コミュニティとマイノリティー—多文化共生の実践と課題—」 内 容 言語、カースト、宗教的アイデンティティの交錯—首都圏の南インド系住民による音楽活動とコミュニティ形成— 日 時 2020年2月15日 場 所 大東文化会館 テーマ 同人会・古代日印芸能文化交流史			
2	ISHIZAKA, Shinya 日 時 2019年7月19日 場 所 Universiteit Leiden, Nederland 参加者 発表者1人・聴衆約20人 テーマ Quest for a Non-exclusive Politics: Ram Manohar Lohia and the Anti-caste Movement in India 内 容 インド政治における包摂と排除についてラームマノーハル・ローヒヤーの反カースト運動に注目し考察した その他 学会名称) International Convention of Asia Scholars 11 日 時 2019年10月19日 場 所 The Madison Concourse Hotel, Madison, Wisconsin, USA 参加者 発表者1人・聴衆約10人 テーマ Glocalization of Natural Farming 内 容 自然農法のグローバル化とインドの政治経済社会変動との関連について考察した その他 学会名称) 48th Annual Conference on South Asia, Madison			
3	鈴木真弥 日 時 2019年7月16日 場 所 Leiden University 参加者 15名 テーマ The Transnational Anti-caste Movement and the 'Confused' Identity of the Dalit Diaspora in the UK 内 容 イギリスとの反カースト運動とダリト移民のアイデンティティの問題について報告した その他 The 10th International Convention of Asia Scholars (ICAS) 日 時 2020年1月11日 場 所 東京外国語大学本郷サテライト（東京） 参加者 30名 テーマ 現代ダリト運動におけるグローバル化とローカルな実践の重層的展開——イギリスのダリト移民調査から 内 容 イギリスのダリト移民に関する調査報告を行なった その他 2019年度第六回 FINDAS 研究会（科研 16K16659 と共催）			
4	片岡弘次 日 時 2019年12月5日～8日 場 所 パキスタン、カラチー市 参加者 200名 テーマ 「永遠の詩人ガーリブ」、「ウルドゥー語と日本語の単語が持つ意味の範囲の違いが翻訳に与える影響」			
No.	調査			
1	井上貴子 日 時 2019年2月18日～3月1日 場 所 インド マディヤプラデーシュ州、マハーラーシュトラ州 目的 古代日印文化交流に関する調査 成 果 本年度中に古代日印文化交流にかんする著書を執筆予定			
2	小尾 淳 日 時 2019年1月17日～29日 場 所 インド 目的 資料収集 成 果 マドラス音楽アカデミー図書館で資料を収集した			

第8班	No.	刊行物等			
	1	井上貴子 書名 『音楽コミュニティとマイノリティー多文化共生の実践と課題—』 概要 単著 3. 言語・カースト・宗教的アイデンティティの交錯—首都圏の南インド系住民の音楽活動と「文化的仲間集団」— 出版社 独立行政法人日本学術振興会 2017年度～2019年度科学研究費補助金基盤研究(B) Music Communities of Ethnic and Cultural Minorities in and from Japan (研究代表者 Hugh de Ferranti) 発行年月 2020年2月			
	2	小尾 淳 書名 『近現代南インドのパラモンと賛歌—バクティから芸術、そして「文化資源」へ』 概要 芸能を切り口に南インドのカーストと文化の関係性について論じた 出版社 青弓社 発行年月 2020年2月			
	3	鈴木真弥 書名 三田評論 (2019年11月号) 26-29 概要 【特集：変わるインドと日本】現代インド社会の諸相—見える／見えにくい変化 出版社 慶應義塾大学出版会 発行年月 2019年11月			
		書名 FINDAS International Conference Series 4 概要 Examining Stigmatization of Leather Industry : By Focusing on the Labor Forms of Dalits and Buraku Toshie Awaya, Tsutomu Tomotsune and Maya Suzuki (eds.) 出版社 東京外国語大学南アジア研究センター 発行年月 2020年3月			
		書名 東京外国語大学南アジア研究リサーチペーパー 9 特別号 概要 Nandita Das Special Lecture “Personal Life is Political: Women’s Issues in Contemporary India” Toshie Awaya and Maya Suzuki (eds.) 出版社 東京外国語大学南アジア研究センター 発行年月 2020年3月			
	No.	その他 (書評)			
	1	井上貴子 書名 『近代インドのエリートと民衆：民族主義・共産主義・非パラモン主義の競合』志賀美和子著 概要 書評 発行年月 2020年3月			
	2	鈴木真弥 書名 『アジア経済』60 (2) 73-76 概要 書評 「油井美春『現代インドにおける暴動予防の政策研究』昭和堂、2017年」 出版社 アジア経済研究所 発行年月 2019年6月			
	第9班	明清の文言小説と文人たち —張潮『虞初新志』訳注—			
研究班の活動					
No.		開催日時	開催場所	参加人数	研究会 (テーマ・内容・発表者)
1		4月17日	板橋校舎 2-0423	5名	『虞初新志』巻一 「大鉄権伝」の訓読・翻訳の検討 (小塚)
2		5月15日	板橋校舎 2-0423	5名	『虞初新志』巻一 「秋声詩自序」の訓読・翻訳の検討 (荒井)
3		6月12日	板橋校舎 2-0423	4名	『虞初新志』巻一 「盛此公伝」の訓読・翻訳の検討 (田中)
4		7月24日	板橋校舎 2-0423	4名	『虞初新志』巻一 「湯琵琶伝」の訓読・翻訳の検討 (小塚)
5		9月25日	板橋校舎 2-0423	5名	『虞初新志』巻一 「小青伝」の訓読・翻訳の検討① (荒井)
6		10月23日	板橋校舎 2-0423	4名	『虞初新志』巻一 「小青伝」の訓読・翻訳の検討② (荒井)
7		11月20日	板橋校舎 2-0423	4名	『虞初新志』巻一 「義猴伝」の訓読・翻訳の検討 (田中)
8		12月18日	板橋校舎 2-0423	4名	『虞初新志』巻二 「柳敬亭伝」の訓読・翻訳の検討① (小塚)
9		1月22日	板橋校舎 2-0423	5名	『虞初新志』巻二 「柳敬亭伝」の訓読・翻訳の検討② (小塚) 巻一のまとめ、今年の予定の確認等
10	2月19日	板橋校舎 2-0423	4名	『虞初新志』巻二 「汪十四伝」の訓読・翻訳の検討 (荒井)	
11	3月26日	板橋校舎 2-0423		新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点より中止	
2-0423：中国文学科研究スペース					

2019年度〔国際交流講演会〕

宗教儀礼に見る仙薬としての茶 ―「称名寺聖教」を中心に―

実践女子大学・文芸資料研究所客員研究員 張 名揚

2020.2.22(土)10:00～11:30 大東文化会館3階 K-0302 研修室

日本の喫茶文化というと、「茶禅一味」という言葉や、茶を将来したとされる臨済宗の明庵栄西(1141～1215)などを思い浮かべる人もいるだろう。そうした発想の背景には、茶と禅は強い結びつきがあるものという通念がある。しかし、これは正鵠を射た理解とは言い難い。

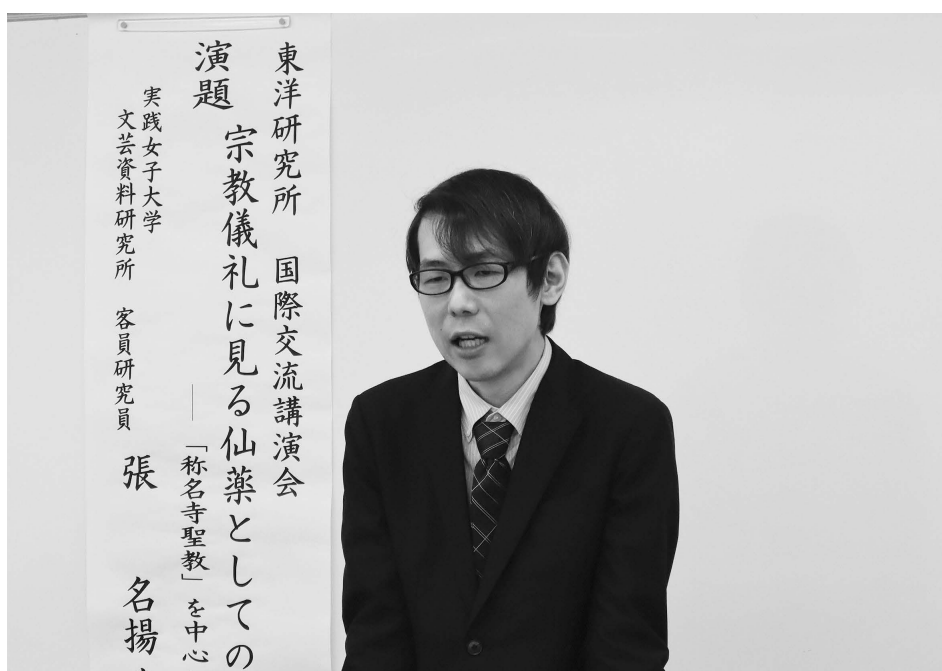
そもそも、栄西が茶を将来したとされていることには、再考の余地がある。栄西が撰述した『喫茶養生記』は日本における最古の茶の専門書として知られているが、その序文には「我が朝日本、昔より之(茶)を嗜愛す」とあることから、上代にはすでに喫茶の風習があったことがわかる。また、本書の下巻には「喫茶法」という項目が設けられ、そこには「此の茶、諸天嗜愛す。仍りて天等に供する時に茶を献ず。茶を供せざれば則ち其の法、成就せず」、「貴きかな、茶。上は神靈諸天の境界に通ず」と見えており、当時の日本では茶を供物として利用していたとみられる。

また、『喫茶養生記』には禅に関係する記述が一切見当たらないのに対して、複数の密教文献が引用されている。これより、本書は密教思想を踏まえて撰述されたものであり、ここに見える供物としての茶も、密教儀礼と深い関係があると推察される。事実、中世日本の密教では茶を供物として

利用していた。神奈川県称名寺(真言律宗)所蔵「称名寺聖教」によれば、茶を供物とする修法の多くは中国から伝来したとされる儀礼であり、それは密教では「天」の類に位置付けられる星宿を供養するものである。たとえば、同寺所蔵「順忍書状」紙背「題未詳聖教」と「秘鈔口決 本抄第十八巻」の記述によれば、茶は「仙人」の嗜む仙薬であるため、この仙薬を「大仙」・「天仙」と称される星宿に捧げると記載されている。

加えて「称名寺聖教」からは、茶を捧げる際の作法も垣間見ることができる。「称名寺聖教」では茶を入れる容器を「白瓷」と指定しており、この「白瓷」は「シラシ」と称され、日本の国産品と推定されている。宋代以前の中国喫茶文化と深く関わる点で注目に値するものであり、今後検討を進めていきたいと考えている。

このように、茶を供物として星宿(「天」)に捧げることは、中世日本においてはごく一般的に行われていたようである。そして、これは『喫茶養生記』に見える「天等に供する時に茶を献ず」という記述と共通しているため、喫茶文化史のみならず、『喫茶養生記』の宗教思想史における位置づけについても改めて考察していかねばならない。



■名簿

管理委員会委員 (7名)

- 1 岡崎 邦彦
- 2 小林 春樹
- 3 田中 良明
- 4 小塚 由博
- 5 宮瀧 交二
- 6 滝口 明子
- 7 田辺 清

専任研究員 (4名)

- 1 岡崎 邦彦 (所長)
- 2 栗山 保之
- 3 小林 春樹
- 4 田中 良明

事務室 (2名)

- 1 岡本 禎郎
- 2 宮本 恵

兼任研究員 (18名)

- 1 小塚 由博
- 2 高橋 睦美
- 3 宮瀧 交二
- 4 J アバイ
- 5 齋藤 俊輔
- 6 藏中 しのぶ
- 7 田中 寛
- 8 齊藤 哲郎
- 9 篠田 隆
- 10 須田 敏彦
- 11 滝口 明子
- 12 小尾 淳
- 13 井上 貴子
- 14 田辺 清
- 15 鹿 錫俊
- 16 鈴木 真弥
- 17 吉村 武典
- 18 高田 茂臣

兼任研究員 (67名)

- 1 相田 満
- 2 芦川 敏彦
- 3 アブドリ・ケイワン
- 4 鏡屋 一
- 5 安保 博史
- 6 荒井 礼
- 7 池田 久代
- 8 石井 啓一郎
- 9 石坂 晋哉
- 10 石田 英明
- 11 出田 恵史
- 12 伊藤 一彦
- 13 今井 秀和
- 14 上野 英詞
- 15 植松 希久磨
- 16 江崎 隆哉
- 17 王 宝平
- 18 岡倉 登志
- 19 岡本 佳子
- 20 小川 陽一
- 21 オレグ・プリミアニ
- 22 片岡 弘次
- 23 菅野 友巳
- 24 藏田 明子
- 25 小坂 眞二
- 26 小島 麗逸
- 27 小林 龍彦
- 28 小林 敏男
- 29 近藤 邦康
- 30 斎藤 正道
- 31 笹生 美貴子
- 32 佐藤 志乃
- 33 篠永 宣孝
- 34 柴田 善雅
- 35 嶋 亜弥子
- 36 進藤 英幸
- 37 鈴木 珠里
- 38 ソルマニエ 貴実也
- 39 高木 ゆみ子
- 40 高橋 あやの
- 41 中林 史朗
- 42 中村 聡
- 43 中村 士
- 44 中村 菜穂
- 45 成田 守
- 46 南里 浩子
- 47 布村 浩一
- 48 濱 久雄
- 49 浜口 俊裕
- 50 林 裕
- 51 原 隆一
- 52 日吉 盛幸
- 53 深見 和子
- 54 舟橋 健太
- 55 フレデリック・ジラル
- 56 細井 浩志
- 57 増木 優衣
- 58 松本 公一
- 59 三田 明弘
- 60 ムハマド・ズベル
- 61 矢ヶ崎 善太郎
- 62 山下 克明
- 63 山田 準
- 64 由川 稔
- 65 吉田 雄介
- 66 依田 徹
- 67 渡邊 義浩

『藝文類聚』(巻48) 訓讀付索引

大東文化大学東洋研究所「藝文類聚」研究班 代表 中林 史朗

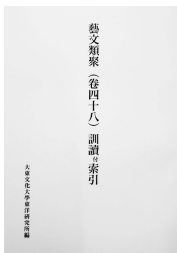
令和2年2月25日発行／B5判 84, 42頁／ISBN 978-4-904626-38-2／頒価 4,000円(税別)

「藝文類聚」は中国の類書の中でも早い成立に属する類書で、日本文学への影響は計り知れないものがある。その『藝文類聚』を巻ごとに訓読文を施し、四部叢刊に採録されている作品については校異を付し、最後に利用者の便を考えて重要語彙索引を掲載したものである。

歴史研究者からの要望に伴い、巻45以降職官部の読解に着手している。

本巻には『藝文類聚』巻48職官部4(録尚書 尚書令 僕射 吏部尚書 尚書 吏部郎 侍中 黄門侍郎 散騎常侍 給事中 中書令 中書侍郎 驃騎將軍)の訓読文・校異・注(典拠)・索引を収めている。

《既刊》巻1～16、巻45～47、巻80～89



『茶譜』巻11(下) 注釈

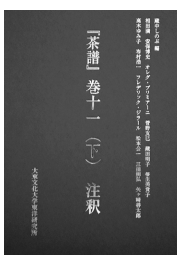
藏中しのぶ、相田 満、安保 博史、オレグ・プリミアニ、菅野 友巳、藏田 明子、
笹生 美貴子、高木 ゆみ子、布村 浩一、フレデリック・ジラルール、松本 公一、三田 明弘、
矢ヶ崎 善太郎 共著

2020年3月6日発行／B5判 262頁／ISBN 978-4-904626-40-5／頒価 10,000円(税別)

『茶譜』全18巻は、茶道流派の生成がきざし始めていた寛文年間(1661～1673)頃の成立とされ、茶道全般におよぶ総合的な類聚編纂書である。各項目について、千利休流・小堀遠州流・古田織部流・金森宗和流等、流派のちがいを対照的に提示しつつ、茶の湯や茶室にかかわるさまざまな記事を類聚編纂した茶道百科事典ともいべき性格を備えている。

本書は、『茶譜』最善本とみなしうる国会図書館本を底本とし、伝存する四種の写本(国会図書館本・静嘉堂文庫本・内閣文庫本・岩瀬文庫本)すべてを校合して【校異】を示し、校訂をくわえた【本文】を掲げ、【訓み下し文】【大意】を加え、さらに若干の【語釈】と【考察】を施したものである。

巻末論文として、藏中しのぶ、オレグ・プリミアニ「『茶譜』巻十一の錯簡と本文の復元」を付す。
《既刊》巻1～巻11(上)



大野盛雄 フィールドワークの軌跡 IV

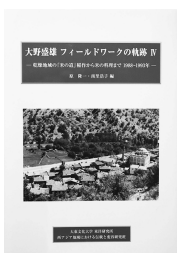
—乾燥地域の「米の道」 稲作から米の料理まで 1988～1993年—

大東文化大学東洋研究所 西アジア地域における伝統と変容の研究班 原 隆一・南里 浩子 編

2020年2月25日発行／B5判 255頁／ISBN 978-4-904626-37-5／頒価 8,000円(税別)

今回のIV巻は、「乾燥地域の「米の道」—稲作から米の料理まで—」と副題が示すように、1988年から1993年まで6年間にわたって、とても稲作には似つかない西アジア、地中海、西アフリカ、中央アジアなどユーラシア乾燥・半乾燥地域の各地(4地域、14カ国)の「米の道」を訪ねた現地踏査記録である。大野氏が残した手書きメモやフィールドノートや写真などの生データを時系列に整理し、解説をくわえたものである。

これまで大野先生の主たる現地調査方法は長期継続による定点調査法にあったが、今回の「米の道」調査研究では、一つのテーマの下に広い空間を同時期に一気に踏査する広域調査法に大きく変わっている。



天心をめぐる人々

大東文化大学 東洋研究所・岡倉天心研究班(代表 田辺 清)

2020年3月25日発行／A4判 76頁／ISBN 978-4-904626-39-9／頒価 4,000円(税別)

本書は2012年4月に発足した「天心研究班」の研究成果を発表する三冊目のものである。天心を曾祖父に持つ岡倉登志大東大名誉教授の論考を筆頭に5名の研究者が各自の専門性を生かしながら天心研究の更なる考察の方向を模索している。今回は岡倉天心(覚三)の周辺の人々との関わりを中心に分析しているが、本書で生じた課題を新たな視点や方法論によって、次の段階で展開し、その成果等を公表していくことも既に検討しはじめている。



第212号 (2019年7月25日発行)

- 渡 邊 義 浩 / 漢書学の展開と「古典中国」
 小 林 春 樹 / 荀悦 『漢紀』「孝成帝紀」一卷 第二十四の検討
 — 『漢書』紀十「成帝紀」および他の『漢書』の記述との比較を中心として—
 須 田 敏 彦 / バングラデシュ農村における若者の近未来の自画像
 — 中学年を対象とした進路希望アンケート調査の分析—
 植 松 希久磨 / 習近平講話と熟語
 — 『現代漢語詞典第7版』の語彙を中心として—
 出 田 恵 史 / クラシックバレエにおける「身体イメージ」と「鏡」の民族誌的研究
 — タイのバレエ団の事例から

第213号 (2019年11月30日発行)

- 濱 久 雄 / 顧炎武の『詩経』観 — 『日知録』を中心として—
 増 木 優 衣 / インド・パンジャブ州におけるダリト問題に関する研究動向
 篠 田 隆 / インド・グジャラート州における牧畜カーストとモビリティ
 — ラバリー学校の第1次実態調査の事例を中心に—
 吉 田 雄 介 / 手織物生産から見る遊牧と定住の間
 — イラン・チャハルマハール&バフティヤーリー州の事例から—
 田 辺 清 / レオナルド・ダ・ヴィンチと東方(Ⅱ) — 《岩窟の聖母》をめぐって—

第214号 (2019年12月25日発行)

- 高 橋 あやの / 雨占研究序説
 田 中 良 明 / 『漢書』五行志に於ける漢代日食記事
 相 田 満 / 楊貴妃日本に渡る — 遺跡と遺物と伝説と—
 布 村 浩 一 / 句題詩の解釈における諸問題 — 「呉江」「秦嶺」を例にして—
 荒 井 礼 / 蘇曼殊の女性 — 自己愛的恋愛—

第215号 (2020年1月25日発行)

- 松 本 公 一 / 密教における香薬テキストについて — 『阿婆縛抄』「香薬」を中心に—
 柴 田 善 雅 / 1920年代満洲の日系株式市場
 滝 口 明 子 / 「トルコ装束の画家」リオータル研究序説 — 文化史的考察—
 嶋 亜弥子 / 最近の中国農村出身出稼ぎ労働者の動向に関する一考察

この他の東洋研究所刊行物についてはホームページをご覧ください。

刊行図書取扱店

■(有)池上書店

〒175-8571 板橋区高島平1-9-1 大東文化大学2号館B1
 TEL: 03-3932-7567 FAX: 03-3932-7544
 E-mail: ike-book@smail.plala.or.jp

■大東文化大学内購買部(株)進明堂書店

〒355-8501 埼玉県東松山市岩殿560
 TEL: 0493-34-4430 FAX: 0493-34-5622
 E-mail: info-daigakuten@shinmeido.co.jp

■汲古書院

〒102-0072 千代田区飯田橋2-5-4
 TEL: 03-3265-9764 FAX: 03-3222-1845
 E-mail: kyuko@fancy.ocn.ne.jp

■東方書店業務センター

〒175-0082 板橋区高島平1-10-2
 TEL: 03-3937-0300 FAX: 03-3937-0955
 E-mail: tokyo@toho-shoten.co.jp

2020年度 東洋研究所 秋の公開講座のお知らせ

『現代中国の内政・外交問題』—最近の政治と外交』

※今回は例年のテーマ「アジアの民族と文化」ではなく、中止となった「夏休み公開講座」のテーマで開催します。

主催：大東文化大学 東洋研究所

日程・テーマ・講師	講義概要
<p>11月12日(木) 13:00～15:00 中国の朝鮮半島への“影響力” 東洋研究所 兼任研究員 伊藤 一彦</p>	<p>近年、北朝鮮の核開発は、東アジアのみならず世界的に関心を集める重要だが解決困難な問題になっています。特に日本への影響は大きいものです。金正恩は2018年3月から10か月間で4回も訪中し、習近平にトランプとの交渉への助言を求めるなどしていますが、中国が北朝鮮に対する影響力を行使して北朝鮮の「暴走」を止めてくれないだろうという期待が小さくありません。しかし最近では核実験の再開が懸念されることもあり、中国の「影響力」に対する疑念も出ています。この講座では、韓国も含め、中国と朝鮮半島の関係を理解するための材料を提供するつもりです。</p>
<p>11月19日(木) 13:00～15:00 現代中国の労働問題を考える 東洋研究所 兼任研究員 嶋 亜弥子</p>	<p>中国はいま、国家の発展に必須となる技術人材を育成しながら、雇用の安定・拡大を推し進めることを急務としています。本講座では、中国で「農民工」と呼ばれる農村出身出稼ぎ労働者や農村女性を取り上げます。農村から都市にやってきた出稼ぎ労働者の都市での就業実態、農村部で活躍する女性の実態について既存研究や独自のアンケート調査結果などを用いて詳しくご紹介します。都市を支える重要な一員となった農村出身出稼ぎ労働者と、農村の発展や地域振興を支える重要な存在となりつつある農村女性を通して、現代中国における労働問題について考えたいと思います。</p>
<p>11月26日(木) 13:00～15:00 中国100年政治外交史 —安藤正士『現代中国年表』を読む 東洋研究所 専任研究員 東洋研究所 教授 岡崎 邦彦</p>	<p>中華人民共和国建国後、中国の政治指導は毛沢東 - 華国鋒 - 鄧小平 - 江沢民 - 胡錦濤 - 習近平へと引き継がれてきました。講座では、安藤正士『現代中国年表 1941-2008』(岩波書店)を参考にして、それぞれ指導者の政治、外交、日中関係について読み解き、その政策の違いや共通点などを整理します。そこから現在の中国大国主義への過程と、今後日本の対中国外交を考えたいと思います。同時に、日本のこれまでの中国に対する友好や援助が、中国の権力闘争にどれほど振り回され、利用されてきたか、日本の甘い外交政策を明らかにできるでしょう。</p>

■会場：大東文化会館 3階 K-0302 研修室 ■受講料：無料
■交通：東武東上線『東武練馬駅』下車徒歩3分 ■定員：15名(先着順)

〔問合せ先〕 大東文化大学 東洋研究所
TEL：03-5399-7351 FAX：03-5399-8756 E-mail: tokenji@ic.daito.ac.jp

※注意事項

- ・受付は先着順とさせていただきます。定員を超過した場合は、やむを得ずお断りの連絡を差し上げるようになります。あらかじめご了承ください。
- ・駐車・駐輪はできません。お車、バイク、自転車でのご来場はご遠慮ください。

新型コロナウイルス感染状況次第では、開催の中止や日程変更等の事態が生じる可能性があります。講座の中止や変更等が発生した場合、東洋研究所ホームページにてお知らせいたします。

<p>大東文化大学 東洋研究所 所報 No.73</p> <p>2020年7月25日発行</p> <p>印刷：(株) 東京技術協会</p>	<p>編集・発行 大東文化大学東洋研究所</p> <p>〒175-0083 東京都板橋区徳丸 2-19-10</p> <p>TEL (03) 5399-7351 FAX (03) 5399-8756</p> <p>E-mail : tokenji@ic.daito.ac.jp</p> <p>URL http://www.daito.ac.jp</p>
---	--